

2 平成12年度調査結果のまとめ

本調査結果では、ダイオキシン類の蓄積濃度を毒性等量で評価すると、平成11年度調査結果と同様、鳥類（トビ・カワウ）で他の生物に比較して蓄積濃度（湿重量あたり）が高い個体が見られた。筋肉、脂肪及び肝臓の分析結果を比較すると、脂肪における蓄積濃度が高く、カワウの脂肪で他に比較して高い蓄積濃度が認められた。哺乳類では、海棲哺乳類（オウギハクジラ、スナメリ）で陸棲哺乳類（アカネズミ、タヌキ）に比較して若干、蓄積濃度が高かった。

蓄積濃度の経年変化の傾向についてみると、11年度は、10年度調査結果と比較すると生物によってはダイオキシン類の平均濃度の減少傾向が認められたが、12年度調査結果では、寿命の長いクジラ類や鳥類においては濃度の減少は見られていない。しかし、比較的寿命の短いアカネズミでは、11年度には10年度調査結果と比較すると急激な蓄積濃度の減少が認められたものの、12年度調査は、11年度調査結果にほぼ等しかった。今後もモニタリング調査を継続し、経年変化の傾向について、注意深く検討する必要がある。

同一生物内でも蓄積量の個体差が非常に大きいため、努めて多くの検体数を集めて年齢や性別等を考慮し検討することが重要である。

なお、野生生物におけるダイオキシン類の影響について検討を行うため、本調査対象生物の中から鳥類（トビ）を選び、影響の指標となると考えられる薬物代謝酵素活性等のバイオマーカーについて調査を行い、ダイオキシン類の蓄積量との関連について検討をすることが重要である。

注) バイオマーカーとは 生体に取り込まれた化学物質に反応して、体内に出現する物質であり、化学物質の影響の指標となるものであるが、ここではダイオキシン類の影響の指標と考えられる誘導酵素(CYP1A1)等の測定を行う予定である。